

経はばつぐんだ。勉強のほうは正樹のほうがちよっと、いや、わりとできる。反対だけでもなんとなくふたりはウマガあった。たぶん、クラスではあんまり目立ったことはないという点で似ていた。大勢のなかではふたりとも照れ屋というところがあった。決して陰気ではないけれど、おとなしいやつという部類なのだろう。まわりからそう見られてるのもわかっているし、互いに本当はそうじゃないことも知っていた。和馬は今みたいにおもしろいことを言い出す正樹が気に入っている。正樹は、和馬のなにかと器用でできばき動くところが好きだった。

正樹はとりあえずリュックに、冷蔵庫の冷えた麦茶をうつした水筒を入れた。方位磁石もポケットにつっこんだ。普段はあまりかぶらないキャップもかぶった。

ふたりは自転車でいちど和馬の住むマンションに寄った。和馬も同じように、リュックを背負いキャップをかぶって出てきた。

なんだか、これから夏休みがはじまるような気分になった。もちろんそれぞれ親になんか言わなかった。ふたり、秘密の冒険者みたいですでにほこらしい気持ちなのだった。「さて、どこ行こうか。迷子になるのにどこってのも変だなァ」

と和馬が言った。

確かに見知らぬところへ行くのだから、どこかをめざす

のも変な話だ。まずは大川を渡って、町の方へ行くことにした。大川までだって、十五分はかかる。ふたりは並んで走った。

八月も終わるのに、街路樹のなかでセミがわんわんと鳴いている。

「おれ、じつは自由研究まだやってない」

和馬が言った。

「おれやったよ」

「なににした？」

「アリの研究。一緒にしたことすればいいよ」

「サンキュー」

和馬は細い目をさらに細めた。ゲームをしているときはあまりあれこれ話さないで、大げさに言うと、久しぶりに会ったような新鮮な気分だった。

車どおりの多い車道に出た。アスファルトの照り返しで、下からも熱が上がってきた。並んでは走れないので、和馬の後ろについた。はたから見れば「迷子になりに行く」なんて馬鹿らしいことをいっしょにしている和馬の背中を見ていると、それが自分の分身のようにも思えるのだった。

二

「おうい、どこ行くの」

川の手前の交差点で信号待ちをしていると、道の左がわ